オーディオ実験室収載

TruPhase の活用(16)
—音源の位相確認(16)—

１．はじめに

TruPhase の位相反転機能を利用して音源の位相確認を行っていますが、前報(15)に引き続き CD の位相確認を行います。

２．TruPhase の位相反転機能による音源の位相確認計画

前報(8)と同様、前報(1)と同じ経路で CD の位相確認を行いつつ、バッハの CD を聴いていきます。

CD ドライブ→fidata HFAS1-S10→Brooklyn DAC+→TruPhase
→300B シングルアンプ

試聴した CD 音源は、バッハの作品で下記のとおりです。

Ars Vivendi　MRC 021
J.S.Bach　Toccata und Fuge d-mol 他
Hebert Collum 他

FYCD 124
J.S.Bach　Fantasie et Sol Mineur BWV542 他
Philippe Lefebvre

マーキュリー
J.S.Bach　Trio Sonata 集
Lorenzo Ghiermi

３．TruPase の位相反転機能による音源の位相確認結果

上記 CD について、Brooklyn DAC+での位相反転と TruPhase での位相反転の結果が同じになるかどうかが焦点です。

音量調整を容易にするため、Brooklyn DAC+では位相反転させず、TruPhase で位相反転させた状態で TruPhase のヴォリュームを固定し、TruPhase での位相反転では、Brooklyn DAC+でのヴォリュームでの調整だけにしました。

そして、Brooklyn DAC+では位相反転させないで、TruPhase での位相反転有り無しで聴いていきます。

Hebert Collum 他のオルガン演奏盤は、各地の Siberman のオルガンの演奏を集めたものです。位相反転させますと、全体域にわたって定位があまく、音の焦点がぼやけています。位相反転させないと、高域はきちんと定位し、低域は広がり感があり、

ミーントーンで調律された Siberman のオルガンの澄んだ音色が魅力的です。しかし同じ Siberman 作のオルガンとは言え、場所が違うと音色が違うところが面白いところです。

Philippe Lefebvre 盤は、ノートルダムのオルガンでの演奏を集めたものです。位相反転させますと、定位が曖昧になり、音の焦点が定まりません。位相反転させないと、高域はきちんと定位し、低域は広がり感があります。寺院の火災でどうなったか心配なところです。

Lorenzo Ghiermi 盤は、ミラノの聖シンプリチャーノ大聖堂のオルガンの演奏で 2010 年の録音です。位相反転させますと、定位が曖昧になり、音の焦点が定まりません。位相反転させないと、録音が新しいだけあって、聖堂の臨場感あふれる音場感が楽しめます。

４．まとめ

上記 3 盤とも正相であることが分りました。個々のオルガン固有の音色がよくわかります。

以上